

## 身一つ庵

馬場駿

一

身体の上下左右が全て風であることがこれほどまでに恐怖心をあおるとは知らなかった。私はワイヤーを握り締めると吊橋の途中で不様にも硬直した。歩き出そうとすれば片手を離して前を向かなければならない。しかしそうしたとたん身体のバランスを崩すことは目に見えていた。しがみついた方向も悪かった。海側なのだ。目の高さにある遙か彼方の水平線が揺れている。視線を下げると、黒い柱を限りなく並べたような断崖に外海独特の荒波が勢いよく当たっては砕け散っている。波と言えどもっと身近な処にもあった。足もとの板が定期的に上下動を繰り返しその波動が北の橋詰に向かって走っていく。十数メートルはあろうかという吊橋の高さも手伝って吐き気を催した。下に吸い込まれるような気がして慌てて空を見た。もともと高い所は苦手だった。もう一

歩も動けなかった。助けを求めようにも辺りに人影はない。そもそもこんな強風の日に吊橋を渡る方がどうかしている。進退窮まった。いつだつてそうだ。見通しが甘く、闇雲に踏み込んだあとで臍を噛む。唸る風に妻の八千代の蔑むような笑い声が混ざり、思い出したくもない記憶の中へと引き擦り込まれた。

「これからどうやって食べていくつもりか？」

目尻が小さく痙攣し口元が右側に大きく歪む。八千代が私を非難するときの顔はひときわ醜かった。会社を一日休み、電話で有給休暇にしてほしいと頼んだだけで、どこをどう解釈するとそういう台詞になるのか。確か熱があると聞いたはずだ。それなのに体を気遣うそぶりすら見せない。

「お前、一人で生きているつもりか」

「いいわよ、あなたがそのつもりなら……」

八千代が射るような眼をして言った。

普段から離婚を考えているからとつさに口をついて出るのだろうか。こっちは家族に対する思いやりの有無を問うたに過ぎない。このやりとりの直後に妻を殴った。初めてふるった暴力だった。八千代は意味不明な言葉を

並べて後退りをした。その口元が赤く醜く染まっている。不思議な快感が襲つてきて、熱いものが全身にみなぎり、それは言葉にも勢いをつけた。

「出ていけ、そんな面、見たくもない」

フツと笑つた。その言葉通りにはならず、結局家を出てきたのは他でもない自分だった。しかも八千代があのと時独特の嗅覚で察知した失業の果てに。

私は吊橋を這つて渡ることを考えた。それなら過つて落下する危険も小さい。しかし甘かつた。揺れが直に身体に伝わり板のきしむ音までが聞こえてきた。突つ伏してから何分経つただろう。

「邪魔だよ、何してんだ、あんたは」

頭の上で声がしたかと思つと誰かに靴底を蹴飛ばされた。

「お恥ずかしい、怖くて動けないんですよ」  
私は下を向いたまま情けない声で言つた。

「いい歳をして甘つたれるな」と声の主は冷たい。

彼の足が目の前を通り過ぎる刹那、必死に彼の右足にすがりついた。

当然彼の上半は崩れ前のめりになり両腕を大きく振つてかろうじて転倒を避けた。

「バカ野郎！ 落ちたら死ぬんだぞ」

「だからお願いしているんです、助けてください」

「ふざけるな、ここまで自分の足で来たんだらうが」

男は私の胸倉をつかんで言つた。

言われてみれば確かにそうだ。なぜ途中まで進めたのか。そのなぜの中に現在の自分がある。落ちてもいいとどこかで思っていたからではないのか。と気づいたそのとき、私は両脇を後ろから抱えられて起こされ、転落防止用のワイヤーロープに押し付けられた。

「見ろ！ この下を、あの傘みたいに落ちてバラバラになりたくなかったら歩くんなんだな」

目の前に緑色の稜線がある。山側のロープだった。眼下に引き潮なのだらう石だらけの江があり、その中央に花柄の傘が折れた骨を上に向けてへばりついている。血がスーツと腰から踵へと降りて行くような気がした。

「すみません、高所恐怖症なんです」

男は苛立ったようので、私の片手をロープから引きはが

すと海側のロープへ運び強引につかませた。

「この橋の幅は一・五メートル、あなたの身長は百七十五センチ位、いか両手を広げた両端の間の長さは身長にほぼ等しいんだ、だから両手で両側のロープをつかんで安全に歩けるんだよ、バカ。渡れないなら戻れよ」

言われた通りに向きを変えて目を瞬いた。渡り始めた橋話の方がずっと近くに見える。

あらためて男を見た。地元の人間とは思えない。白い開襟シャツに背広のズボン、黒い革靴を履いている。五十前後だろう。青白いが、穏やかな顔立ちをしている。

「なんだよ、じろじろ見るな」

「すみません、いえ、ありがとうございます。これなら歩けそうです」

男は苦笑した後、かなりのスピードで遠ざかった。私は揺れを増した吊橋の上で血がにじむほどに強くロープを握り締めた。

吊橋の三分の一、長さ二十メートルほどを十分もかけて戻り、渡口に在る吊橋の長さ、高さ、定員が記された立て看板の前で溜息をついた。初めて見たような気がする。何かに憑かれたように橋に足を踏み入れた

ときには目に入らなかつたのだ。風が鬱蒼とした原生林を丸ごと揺すっている。シイノキ、イヌビエ、クスノキ、ユウカリ…、心に少しばかり余裕を取り戻して周りを見れば、樹々が涎掛けのような名札を付けているのに気づく。わだかまりひとつで何も見えなくなる人の眼、それはレンズカバーを外していないカメラのようなものかもしれない。人が恋しかつた。さっきのような乱暴な口をきく男でもいい。登山客がするような「こんにちは」という挨拶だけでもいい。しかし誰も来なかつた。私は過去の自分としか話せなくなつた老人のように、ポツンと立っていた。人は、自分以外の人間と関わりを持つことによつて無限の広さの中に居られるが、閉じ籠もるときに占める広さは畳半畳のそれに過ぎない。今の自分がそれだ。判つていてなぜ

首を振りながら強く涙をかんだ。鼓膜がガサツと音をたて、ついでキーンという金属音が耳の中でこだました。涙で汚れたハンカチを注意深く背広のポケットにしまつと、広い道に引き返すべく歩き出した。少なくとも自分では確実な一步のつもりだった。しかし

木の根につまづき気が付いたときは地べたに転がっていた。

八千代の罵る声がまた蘇った。

「いい加減にしろ！」と私は上体を起こし、尻を地面に着けたまま振り向いて怒鳴った。

——誰もいなかった。

「だって、この大事なときになぜ会社を辞めるのか、わたしにだって聞く権利があるでしょ」

八千代はあのととき怯むどころか睨み返して来た。

無理なローンに因る破綻、気づかれた業務上横領、社内での歳の差恋愛の失敗、無能のレッテルを貼られての体のいい解雇。原因を妄想して八千代が並べ立てた事柄は、そのまま私に対する評価であり真正面からの攻撃だった。男のプライドはこの際持ち出さないうにしても、言葉を、夫の胸を抉る凶器として使った八千代を絶対赦せないと思った。入社後初めて欠勤した日からまだ三日しか経っていないかった。しかもその三日の総てを有給休暇にしているのだ。それがたとえ良心に恥じる休み方だとしても私の犯した罪は小さすぎる

ほどに小さい。

私は次の日もその次の日も休んだ。何もする気になれなかった。一つの職場一つの職種で塗りつぶした三十年という年月が、自分の中で徐々に否定されていくのがわかった。

六日目の朝、眠りからさめると八千代がいなかった。もう何が起きているのかは明白だ。私は裸になって煙草をくわえると畳の上で大の字になった。開け放たれた窓からの風に煙が揺れ陰毛がそよいだ。

「倫理も確立していないのに何が不倫だ、ゲスだな」

家出だともでは思わなかった。「あいつも行くところは無い」それだけは確かだから。それより自分が出て行く、もう同じ空気を吸っていること自体が苦痛だ。そう思った。

上体を起こすと、灰皿ではなく畳で直に煙草の火を揉み消した。

「執着するほどの家が、これが。くだらねえ」

さらに掌でフィルターがバラバラになるほど畳に擦りつけた。なぜか快感が走った。同時に娘の顔が脳裏に浮かんだ。結婚するかもしれないと、照れ笑いしながら

中年男を紹介しに来た時の顔だった。娘は二十一、自分の顔で生きている。少なくとも私の面影など、どこにも宿していない。二人目の子は脳の障碍の根を恐れる医者の勧めもあつて私が強硬に中絶させている。医学的な見地からなので子どものためでもあつたと思つている。

妄想もどきの遊りから我に返ると、目の前で土埃が風に舞つていた。

行く当てのない旅を始めてしまった。むろん今夜泊まる宿も決まつていない。いまならまだ自分を笑い飛ばして家に帰れるような気がした。今しがた吊橋を渡り切れずに引き返したように。「K駅まで一キロ」と書かれた道標が迷わせる、駅まで歩き特急に乗つてしまえば自宅まで、いつもの生活まで一直線ではないかと。すべてを捨てて別の場所で生きる、五十過ぎの身でそんなことができる訳が無い。いくら合理的な自分がしきりに首を振つている。私は駅に向かつて「自然路」を歩き出した。

樹皮が剥がれ落ちツルツルした木の肌が露出したユウカリに相合傘を見つけて思わず立ち止つた。女の名はエミ、男の名はテツオ、傘のマークは上に向かう矢のよ

うにも見える。出会つた男と女が愛し合い、お互いの人格を高め、生活を向上させ、子をつくり育てて次代をつくる。もしそうならこのマークの意味は奥深い。もちろん場所は弁えてもらわなければ困るのだが、あえて彫つて刻んだ若い男女の二人だけの世界の強さが、いまの私には羨ましく思えた。

「家に戻つたとして、そこに何があるんだ？」  
私はまた、その場で木の根に腰を下ろした。

盲目的な愛の果てに駆け落ちしてまでした女に去つていかれ、自暴自棄になつていた私の心の隙間を埋めたのが八千代だった。しかし妊娠して娘を出産した頃から私の前の女を怖れて妄想の虜になつた。明るさは消え、無口になり、そんな中で第二子を中絶してからは夫婦の営みも拒むようになった。矛盾としか思えないのだが、八千代が持ち家に異常なまでの執着をみせ始めた。やむなく二人で働くという無理な資金計画で今の家を購入したのもその当時だ。八千代は仕事で殆ど家におらず大事な時期だった一人娘は八千代の実家が育てたに等しい。家庭から夕食が消え、次いで朝食も消えた。ハウス

を得てホームを失う典型だった。私の晩酌の場はいつしか居酒屋に移り、愚痴を聞いてくれる女将が「妻」になつた。

情けないほどありふれた家庭崩壊のプロセス、そんな中で私は、いつしか相合傘を下向きに差していたにちがいない。触れ合わない体、通わない心、哀しいことにそれを痛みとも感じないようになっていた。

K 駅に戻るとすぐにタクシーに乗り込んだ。とにかく迷っている間は帰れない。

「旅館、民宿、ペンション、ホテル、何でもいいから運転手さんの顔でどこか紹介してくれませんか」

言い方が可笑しかったのか、運転手は声を出して笑うと、体を振って私の顔を探るような目つきで見た。

「面倒は嫌ですよ、お客さん」

客に対して無礼だと、一瞬怒りが込み上げた。自分の顔が歪むのが分かった。

「知り合いのところであればお連れします。じゃないと何かあったときに尻がくるんですよ」

「そこでもいいよ、そう言うしかない。」

運転手は黙って前を向くとドアを閉めた。交渉成立と  
いうことらしい。

チップ欲しさにじらしやがってと腹中で詰ったもののホツとしていた自分が出た。

走りだすと運転手は弁解のつもりだろうか、穏やかな口調で言った、「旅行者つてのはね、お客さん、一泊だけでも何か荷物を持つてるもんですよ。背広姿で手ぶら。仕事で来る人はお客さんみたいに焦点の定まらない目をしてませんしね。ま、疑るなつていうほうが無理、背広の前の汚れも尋常じゃないし」

吊橋に腹這いと言いかけて止めた。相手の疑いを増す効果しかない。私は形だけの礼を口にして車窓に目を移し、苦虫を潰しながら黙った。

## 二

旧家を改造したような民宿「身一つ庵」は、吊り橋のあるY町の西側に位置する山間の集落にあった。

運転手について中に入ると庵主がすぐに出てきて丁寧なあいさつをした。こちらを訝る素振りはない。

運転手との信頼関係がそうさせるのだろうか。少なくとも私の人品骨柄を高評価してのことではなさそうだ。庵主は角刈りの白髪頭で顎に整った髭があり作務衣姿だった。袖が短いのは彼自身が料理をするからかもしれない。ほかには一つ違いの奥さんが働いているだけだと、運転手が耳打ちをした。

部屋に入った後、しばらくして庵主を呼び前金を払おうとした。立場を変えてみれば、それが当然の配慮だと思つたからだ。

「それが必要な方だと思つたなら最初からお泊めるのを断っています。ご自分の別荘のような気持ちでお楽にどうぞ、お気遣いなく」

庵主はそう言うのと風呂を勧めた。檜風呂は体だけでなく心の疲れも癒すからという。運転手め何か言つたな、と私は唇を噛んだ。手許に無様な形で現金が残っている。運転手もそうだった、出した礼金を頑なに拒んでみつともない形にした。こつちが生きてきた世界は違う、一旦出した金を引つ込めさせることは相手に恥をかかせることになる。それはタブーだったのだ。「田舎者があ」と腹の中で嘲笑つた、客をいい気持ちにさせるのもサービス

業に必須だろうと。

「言い忘れました、貴重品はその違棚の下の金庫に。皆さん分かりにくいとおっしゃるんで発案者として恐縮しています」

庵主はそう言うのと腰をあげた。私はといえば、惨めな思いで金を財布に仕舞い金庫の方へと這うはめに。

風呂は離れ屋に在る。下駄をつつかけて庭に出ると一面に打ち水がしてあつた。そよとした風が涼を運んで頬を撫でる。昼間海岸付近に吹き荒れていた風が嘘のようだった。陽は山波の彼方に落ちてはいるが空はまだ十分に明るい。ただ三方を山に囲まれたこの地の特色なのか、沈み込むような空気と見事なまでの静寂さが夜の接近を報せている。

湯から上がって部屋に戻ると、汚れていたはずの背広が上下ともきれいになつていた。もちろんクリーニングに出した訳ではないので完璧ではない。しかし注意を払つてみて初めて分かる程度の僅かな汚れに変わっている。私は小さな感動を覚えた。

偏屈にものを視るのを止めてみると、この宿の心遣いが心に沁みってくる。浴衣の丈もぴつたりのものが出され

ていたし、フリー客の夕食は遅れて当然なのだが、その間の「おしのぎ」にと小梅の入ったおにぎりが、お着きのお茶に添えられていた。反発していた庵主の言葉も彼の優れた人格の顕われなのではないか。私は急に落ち着かなくなった。どうせ暇だからかまってくれるのだろうという推量が少し前に覆されたばかりだ。檜風呂には五人の客がいた。男一人だけのはずはないから少なくとも数倍、夫婦二人で接客するには多すぎる。「パートタイマーかなんかにやらせているんだろう、女将が一人で行き届いた接客ができる訳がない」そう思った。時折自分でも嫌な性格だと呆れるのだが、なぜか素直になれない。背広を再び手にすると手落ちを探すかのように丁寧にあらためた。

「まあ、いいか……」

私は背広を吊るし直すと、入浴後の習慣でテレビを視ようとして部屋の中を見渡した。「無い」とあまりの意外さに口をバクリとさせた。ここは倉庫ではない、客室なのだ、抗議をしようと思った。精神的に押されていた私は、庵主の、いやこの宿の弱点を見つけた嬉しさに部屋を飛び出して食堂に向かった。時間からして調理、配膳

の最中だと踏んだのだ。

「テレビを置き忘れて何がお楽にだ」

床を踏みつけるように歩きながら不思議なほどに胸が高鳴った。

「テレビという与えられた画面から目を離して、ご自身の目と感覚で生きた画面を創っていただきたいんです。ですから客室にテレビは置いていません」

庵主はこともなげにそう言うと、食堂の中で働いている四人の男に私を紹介した。

「中浜です」と仕方なく名乗ると、次々に自己紹介をされた。聞いたそばから名前は忘れていく。興味が無い、こちらは客としてこのいるのだ。

「はじめは僕も怒って同じ抗議をしました」

その中の丸顔の男性が笑顔で言う、全員が交互に顔を見合わせてうなずきあつた。ということは、皆が皆この民宿の客ということになる。客がなぜエプロンをして配膳をしているのか。

聞けば自発的に手伝っているという。

「実は女房に突然逃げられましてね」と、六十前後の品のいい顔立ちの客が自嘲気味に言った。「下着の置き場



所が分からない、ゴミ出しの日も分からない、洗濯はしたことがない、飯は焚けない、料理はからつきしと、それはもう悲惨でした」自分は何でもできる、一人で生きていけないのは女房で、だから黙ってついてくるのだという前提と自信が大きく揺らいだという。「そんなときでしたよ、身一つ庵というこの記事を読んだのは。何だか呼ばれたような気がしましたね」

概ね事情は同じなのか、後の二人もしきりにうなずいている。少なくとも「身一つ」は共通なのだろう。「俺は違っぞ」と声には出さず意識的に胸を張った。

「ここには時計もないんです」

白髪で瘦身の別の客が握手を求めながら言った、「あなたも時計を外しませんか？ あなたの体の中の時計を思い出すために」

口調からしてこの宿のパンフレットか何かの文句らしい。庵主が照れくさそうに微笑している。

私は後退りすることで、握手も、時計を外す提案も明確に拒んだ。

午後八時に夕食に呼ばれた。

案内されたのは木の香漂う囲炉裏部屋だった。庵主はうずくまって炭火をおこしている小柄な女性を立たせた。肩に手を添えて知らせている。

「家内です、耳が不自由なもので主に厨房の方をやらせています」

私が会釈すると女将は目を細め口を窄めて笑顔をつくった。五十歳前後だろうか、可愛いと言っている容貌だったが、客商売にしては粗末な着物が気になった。

出て行く女将を見送りながら食膳が二つあるのに気づいた。庵主が一緒にといい。断る理由もないので向かい合って座った。

楕円形の壺に灰と炭、網がそこに載っているだけの簡素な膳だった。庵主は黙って冷酒を手渡すと後ろに並んでいた肉と野菜を二人の間に移した。

「焼き肉の要領でどうぞ」

しばらくして煙に巻かれたが、不思議に目に沁みはしなかった。庵主は食材について押し付けにならない程度の講釈をしつづけた。全て庵所有の畑で採れたものだと

いう。

「肉も自家製ですか」

私は自分で発した言葉に嫌悪感を覚えた。揚げ足取りで矮小な人間性そのままの皮肉だ。

「鹿を飼う場所が無いので、これは仕入れていきます」

軽い洒落だと理解したのだろう、庵主はストレートに応えてきたのだが、こちらは鹿と聞いて思わず箸で摘んだ肉を網に戻した。

「もつとも飼えば愛情もわいてきてとても食材にはできないでしょうが」

「毎日顔を見ていれば食えない存在になりますよ」

女房とか、娘とかと続けて言いかけて止めた。片田舎の民宿の主人にユーモアが解るとは思えない。私は戻した肉を。ピーマンで覆うと思いついて口に運んだ。癖が無くて驚くほど柔らかかった。

「美味いと思うこと自体、残酷だな」と私は、庵主を一瞥してから網の上に肉を追加した。

庵主は静かに茶を飲んでいる。私はチェックインしてらざつと庵主に威圧されている自分を感じていた。それが何に因るものかは分からない。

冷酒が天然水のように淡白で喉にも胃にも優しく、知らぬ間に本数を重ねていたらしい。私は何時しか饒舌になつていた。籍をおいていたA事務機という会社の批判。昨今の世相への嘆き、政治に対する不満などをまくしたてた。庵主がそれを黙って聞いている。

女将が後出しの料理を持ってきた。

「耳が不自由ということと言葉も不自由ということですよ、ご主人」

バカな質問だと思つたが自分の口を制御できなかった。胸のあたりが締るような感じで痛んだ。それが何なのかは知らない。

女将が何かを感じたのだろう、すぐるような眼で庵主を見た。

「商売とは言えこんなに働かせて胸が痛みませんか」

一矢報いたいと拘る自分が惨めだった。

「家内には、他人様のお世話をして、毎日くたびれ果てて寝るよにといい、それを守らせています」

「なぜです、可哀想でしょうに」

庵主の顔が一瞬曇つたような気がした。

「おわかりになりませんか、それは家内が甘えようとす

れば人様にいくらでも甘えられるからなんです。お世話されるのではなく、お世話してはじめて他人様と精神的に対等になれる。家内のハンディキャップとはそういうことです」

庵主はそういうと、女将にうなずいてみせた後で唇をギョツと閉じた。

何を言ってもやがる綺麗ごとをと、私は思わず脇を向いた。女の障碍をこれ幸いに、言いなりになる安価な労働力として利用しているだけではないか、もしかしたら結婚した目的もその辺りかもしれない。そう思った。

「女将！ お酒、すぐ持ってきて」と私は指差しをして命令口調で言った。

「まだ残ってますよ、早めに用意をするとこの部屋の熱で冷酒が温まってしまいます。おいしく召し上がるには――」

「いいから！ お酒。お世話していただきましようか、女将さんに。早く！」

女将は怯えるようにして部屋を出て行った。

私は、女将が戻ると部屋に煙草を取りに行かせ、次いで布団をすぐ敷くようにと命じ、空いた器が邪魔だと繰

り返し騒いでその都度下げさせた。

さすがに堪りかねたのだろう、庵主が動くようにすると、意外にも女将が激しく首を振った。

私も間髪を入れず大声で怒鳴った、「きれいごと！ 絵空事で繁盛している民宿ですか。さっきの、お世話してお世話してつて話も、建前だけの嘘っぱちですか、ご主人。だったら最初からかっこつけるな」

女将は庵主を笑顔で押し戻してうなずくと、自分で器を持って行った。

何度目だろうか、冷酒を運んできた女将が部屋の入り口で躓き横転をした。その時も、直ぐに駆け寄った庵主に壇を手渡すと、足首をさすり私を見ながら笑顔をつくれた。

私は思わず視線を外した。自分がこの上もなく惨めに思え、急に涙が溢れ出た。

庵主と女将が私をジツと見ているような気がした。午前零時になった。

私の酔いは頂点に達していたはずだが、自分では妙に頭が冴え、むしろ普段より論理的な喋り方をしているような気がした。贖罪のつもりだったのかもしれない。一

時間ほど前に自室に下がった女将のことを私はほめちぎっていた。

「それに引き換え…」

口をついて出たその言葉が引き金になって、私は妻の八千代を罵り始めた。それは駆け落ちした女のことでも巻き込んで度を増していった抑制の効かなくなった舌が、積もりに積もった憤懣のすべてを庵主の前に吐き出したのだ。庵主は私を蔑むでもなく、憐れむでもなく、穏やかな顔で聞いてくれた。相談されて黙っているのには勇氣と技術が要る。一応営業係長まで進み、二十人の部下を持っていた私だ、それぐらいいはよく解る。

「念のために伺いますが、その駆け落ちしました女性の悪口も…」

喋り終えてある種の放心状態に陥っていると、庵主がようやく口を開いた。

「奥さんに言っただんですか、当時直接に」

最近では会話自体がほとんど無いに等しいが、結婚当初は八千代の耳にタコができるほど言っていたようなきがする。結婚は制度だからするが女は二度と信しない。その結果として恋愛は終生しないと。

「かわいそうに」

「同情されるほど落ちぶれちゃいませんよ」

「いえ、奥さん、その頃の八千代さんですよ」

私は意味が解らずに目を瞬いた。

「あなたは八千代さんに愛したから結婚したんじゃない、今も愛していない、これからも愛すことはない、俺の愛は前の女一人のものだと、その都度宣言していたことになるんです。私が彼女なら途方に暮れます」

庵主によれば、八千代が妊娠してから一層私を失うことを恐れ、前の女の影に怯え、マイホームに執着し、ついにはセックスさえ拒むようになった理由は全てそこにあるという。

「もちろん中浜さんのいうように愛情の無い夫婦、愛のない結婚は巷に氾濫しているかもしれませんが」と庵主は続けた、恋愛関係とは言うが結婚関係とは言わない。また、結婚生活とは言うが恋愛生活とはふつう言わない。両者の違いはその長さと質に由来する。結婚した当初は生活の比重は小さい、恋愛の余韻があるからだが、歳月を重ねていくうちに生活の比重が大きくなり、気づいたときには結婚そのものを食いつくしていたりする。結婚

が破綻しようが、形骸化しようが、生活は圧倒的な力で夫婦の弱い心を押し潰し、自己貫徹していく。多くの夫婦の現状がまさにそうだ。しかし、だからと言って最初から愛の芽を摘まれ、心を外されて何が、何処が結婚だろう。生活することには興味が無いのではなく、八千代さんは生活に逃げるしかなかったのだと。

たとえそうだとしても、もう引き返せないと思つた。酒浸りも女遊びも、八千代を「悪者」にして初めて自分なりに正当化できた。庵主の論は、その前提を覆してしまったことになる。会社は今頃後任の係長を私の椅子に座らせているに違いない。もともと欠けて業務が停滞するようなポストではない。娘も破断になるだろう。もつとも四十男を選んだのは気の迷い、壊してやるのが父親の務めかもしれないのだが。

首を振りながら顔をあげると、冷酒を一気に飲み干した。胃がキューツと一気に縮み、ゴフツと何かが込み上げてきた。

#### 四

耳元で小鳥が鳴いていた。こわこわ目を開けると天井に光の輪が揺れている。庭に在る鉢の水でも映しているのだろう。起き上がるうとするとう頭が心臓のように鼓動している。私は枕に顔をうずめて唸り声をあげた。酒飲みが酒を呪う恒例の儀式だ。

物憂い時間が流れた。たしかに部屋に時計が無いといふのは救いだ。雪見障子が十センチほど開いていて雀が入りしている「といふことはもう誰かが部屋に入つて来た」そう思つて周りを見た私は、また小さく感動をした。枕元に水差し、タオル、洗面器、胃薬があり、吊るした背広の下にはアイロンのかかった私のシャツが売りに出すかのようにきちんとたたまれてあった。浴衣も新しいものが隣に置かれている。

「朝湯は当然ながら正午まで」

メモの向こうに庵主の笑みがみえる。

縁側に出た。眼下の土が変色しているのが分かる。近くの木の葉に灰が付いている。私は記憶を辿つた。わずかながら覚えがある。自然に頭が下がった。女将が草木灰を使って私の吐瀉物を処理する姿が目につかんた。その顔も相変わらず穏やかで優しかった。

「何でここまでできるんだ？ 嘘だろう」

陽の光がここぞとばかり刺激してくる。私はうっかり目に涙を浮かべた。気が付けば、ちっぽけな自分が声を殺しながら泣いていた。遅い朝食の後で庵主に誘われ散歩に出た。

朝湯で汗をかいだせいか頭痛は治まっていたし、何よりも機会を見て昨夜の言動を詫びる必要があった。もちろん細部に亘る記憶など無いが飲酒後の自分の性癖は知っている、失礼を重ねたに違いないのだ。

握り飯のかたちをした山と、矢尻のような峻険な山が目の前で対峙している。男女の心身のありようを象徴しているようにも見える。

道の両側には小さな家庭菜園のような畑が続いている。庵主は時折その中に足を踏み入れて花に触れ枯れた葉をちぎっては根元に置いていた。

「ご主人の畑、ずいぶん広いんですね」

私は、身一つ庵の野菜が自前であることを思い出して言った。

「ここからは見えませんが三反ぐらいはあります」

「え、じゃあ、ここは…」

「よそのうちの畑」と庵主はいたずらっぽく笑った。

「叱られませんか」

「野菜にいいことしかしていませんから」

庵主の動きを目で追いながら心と和んでいる自分がい

た。いつの間にか忘れてしまっていた自分だった。

「名前、分かります？ 中浜さん」

茄子、胡瓜、オクラ、トマト…と指を差し思いつくままに名前を呼ぶ、分からなければ笑って首を捻る。それだけのことなのに何故か胸が弾んだ。

しばらく歩くと田圃が現れた。稲穂が諺の通りに頭を垂れている。きつと早稲種なのだろう。頻繁では無いがスズメを追い払うためのパンという破裂音がこだまする。

「雀にとつては作物も天然の木の実も等しく餌なので、人間だけがそれを峻別して盗るなど脅す」

庵主が大真面目で言った。

「いや、人間だって作った自分と自然な自分がわからなくなるんですから、あんまり威張れませんけど」

私はそう言うのと庵主に片目を瞑ってみせた。

「中浜さん、もう大丈夫みたいですねと庵主が道端の雑草の葉をちぎって口に含んだ。

「おいしいんですか、それ」

「この空気には負けますけどね」

庵主の言葉に笑みを返しながら改めて目の前の景色を見た。草、稲、雑木、杉林、近い山、遠い山、：浮き、沈み、映え、翳り、光り、曇る、緑色がこれほどまでに多種多彩だとは知らなかった。というか、気にしたこと無かった。都会で見る緑は緑として一種類にしていたような気がする。少なくともその微妙な色の差を楽しんだ記憶はない。

「都会は形としての文化を知る所、田舎は真の自分を知る所、都会では外を見て、田舎では内を見る。都会で自分の内面を見詰めようとしても無数の眼が気になって出来ないでしょう。都会に無いものがあるから辛うじて田舎の存在意義がある。そんなふうに思っています」

庵主の言葉が素直に自分の中に入ってきた。一日にも満たない時間でこうまで安らいだのはなぜだろう。

私は不思議に思った。

確かに私は疲れ切っていた。自分の生活の、どこに愛があり、どこに張り合いがあり、どこに刺激があり、どこに喜びがあるのか。この歳になるまでの日々を、疑問を抱いたまま過ぎてきた、もう少しましな人生をと心の隅で求めながら。仕事でミスをして大事な得意先を失ってしまったこと、それは単なる引き金に過ぎない。過去と現在の虚しさが将来を生き抜く気力を私から奪ったのだ。それがここに来て、庵主に出会って光芒を感じるようになった。光は別の角度から私の過去を照らした。見ていながら見えなかったものが原因の全てだった。

「吊橋に行ったっておっしゃったでしょ」

話したとしたら昨夜遅くだが明確な記憶は無い。

「あの近くで投身自殺があったそうです。地元のカーブルテレビでやってました」

私はその自殺者の性別、年格好、着衣を聞いて震えがきた。吊橋で出会った男だ、私に來た道を戻れと言ったあの男だ。

「引き返すことができる黄金の架け橋を、そうせずに

彼は渡り切ってしまったんでしょ」

庵主は身内でも失ったかのように哀しそうな顔で言った。

「引き返す勇氣をもってくださいね」

私は庵主の洞察力に驚いた。私の中に吊橋の上に居た私が蘇り、なぜ渡り始めたのかを問ひ直してきた。これには必死に首を振った。知らない。分からないのだ。気がつくといつの間にか石に腰掛けていた。

庵主が横で静かに語りかけている。

「生きるために心を殺してきたあなたが、それを理由に命を絶とうとしたら、あなたは心も体も裏切り、将来を否定するだけでなく過去も否定してしまうことになります。それじゃあ、誰かというのではなくあなた自身が可哀想だと思いませんか」

溜まった涙が落ちる前に一瞬陽に輝くのが見えた。きれいだと思つた。

「わたしもこの女房さえいなければと思つたことが、何度もあります。彼女もきつい労働の連続や私への不満から私に対して何度も同じように思つたはずです。でもね、中浜さん、二人はあなたの前で今日も夫婦で

す。明日のお客さんの前でもそうでしょう。ずっと、ずっと、とそう信じています。信じなければ明日どころか私たち夫婦には今日という日も無いんです」

いまの俺と八千代が同じ、私は心の中でそう気づき、「やりなおせますかね」と力なく言った。

「もちろん、まだ橋の途中じゃないですか」

庵主は私の方に手をかけてさらに言った、「中浜さん、あなたは何年か前の私そのままなんです」と、そして置かれている状況がと補足した。幸い自殺までは考えなかつたが、もめにもめて離婚をし、一人娘にも去られ、何もかもが厭になったという。

庵主によれば、迷い込むような形で当時の小田中壮に泊まり、急性のアルコール中毒に陥つたところを、耳の不自由な館主の娘、つまり現在の女将に救われている。

「ゴミみたいな状態の私を必死に看病してくれました」

二人はそれが縁で結婚し、民宿の後を継いだらしい。「人間、生れるときも一人、死ぬときも一人、結局一人、夫婦も親子もそれを大前提にして初めて、お互い



に思い遣れるのかもしれないね。だからせめて二人でいるときぐぐらいは仲良くしたい。いつからでしたかそう思うようになったのは……」

そこまで言うのと庵主は遠い目をして黙った。

バツタが一匹私の膝を蹴って飛び出し、稲の波の中に消えた。

夕方になって私はようやく自宅に電話を入れた。

「はい、中浜でございます」心なしか声に張りが無い。

八千代がまだ私の苗字を使ってくれている。当然と言えば当然なのだが、何故か胸が詰まった。やつとの思いで声を出すと悲鳴とも感性ともつかない声を出し「生きてたのね、大丈夫なのね」と何度も繰り返した。後は嗚咽に変わり、しばらくは私が何を言っても返事が無かった。

落ち着いてから訊いてみると、吊橋で遭った男の自殺の件は中央のテレビ局でも放映したという。八千代の冒頭の言葉の意味を知り、少しずつ嬉しさが込み上げてきた。

「とにかくもう一度話そう。今夜帰る」

私は自分に言い聞かせるようにそう言うと、ゆっくりと受話器を置いた。面と向かつて話さなければ、万一の言葉の行き違いで取り返しがつかなくなる。そう思ったのだ。

綺麗に磨かれた靴を履いて私が玄関に立つと、庵主と女将が揃って見送りに出てきてくれた。

「女将には失礼ばかり重ねてすみませんでした。いろいろお世話様でした」と頭を下げると、女将は笑みを絶やさず小さくうなずいた。耳で聞けなくても心で聞いてくれたのだろう。

「いつまでも仲の良いご夫婦でいてください」

心からそう言える自分が嬉しかった。

「夫婦の間の愛なんて汗に置かれた火みたいなものです。ちよつとした波でもすぐに消えてしまう。波は無くならないし、炎は小さくなるばかりだし」と庵主が肩を窄めながら笑った。

本当にその通りだと思った。問題はそれをどう克服するかだ。いまなら自戒をこめて言い切れる。

「最後に一つだけいいですか」

私は気になっていたことを訊いてみたくなった。

庵主は微笑で私を促した。

「背広の汚れ落としとかワイシャツの洗濯とか、してくれたのは奥さんですよね」

庵主は困つたような顔をした後、女将の肩を抱いて微笑んだ。女将は照れくさそうにしている。

「料理以外は全部私です、料理も時々は私……」

意外な言葉が返ってきた。

「じゃあ、吐いたものの始末も」

「ええ、私です」

私は恥ずかしさで顔が熱くなるのを感じた。疲れていただろう女将を無理に使い走らせたこと、庵主が女将の障碍をいいことにこき使っていると思い、そう口走つて非難したこと。それらの言動はどれだけ目の前の二人を傷つけただろう。庵主は女将の体力を考え、ちやんと労つているではないか。それなのに無礼な私を罵るところか親身になつて気遣い、立ち直らせようとしてくれたのだ。

「失礼なことばかりしてすみませんでした、気遣つて

いただいているのにバカなまねばかりして」

頭を下げると急に涙が溢れた。ちつぽけな自分、歪んでいた自分、惨めさに包まれた。

「どうぞ頭を上げてください」と庵主は私の肩に手を触れて言った、「わたしは世間的に言えば落伍者です。落伍者だから解かることもあり、して差し上げることもある。ただそれだけのことなんですから」

顔を上げると女将が小さくうなずいて手話をした。

「お幸せに、と家内が言つてます」

庵主が女将の顔を見ながら通訳をした。

「いいえ、奥さんはきつと私にこう言つたんだと思います、わたし、とても幸せです……」

女将は、私の唇を読むようにした後、一呼吸おいてから満面の笑顔を返してくれた。